

日付	曜日	活動内容 & 場所	備考
5月4日	月	Päiviönsaaren päiväkoti	歌の日
5月5日	火	Päiviönsaaren päiväkoti	Fisical Exerciseの日
5月6日	水	Päiviönsaaren päiväkoti	Art Craftの日 特別支援教師・SpeechTherapist訪問
5月7日	木	Päiviönsaaren päiväkoti	遊ぶ日：「Varkauden Perheentalo」園外保育 OT来園・訪問支援
5月8日	金	Päiviönsaaren päiväkoti	Games and Playの日
5月9日	土	休み	
5月10日	日	バルカウス→ヘルシンキ	移動

～日常的に支援を組み込む実践について学ぶ～
(2026年5月4日～8日)

研修施設：Päiviönsaaren päiväkoti

2026年5月4日～8日の5日間、フィンランド・ヴァルカウス市での保育・子育て支援施設の視察を通してフィンランドにおけるインクルーシブ保育の実践と、それを支える制度・地域連携の在り方について多くの学びを得ることができた。今回訪問した Päiviönsaaren päiväkoti は、8か月から5歳までの約70名の子どもが通う園であり、地域の中でも特別支援体制が充実している園として位置付けられていた。自閉症などの特別な支援を必要とする子どもたちも在籍しており、保護者もその特徴を理解した上で本園を選択しているとのことであった。園では、約10名程度の小グループ単位で保育が行われており、子ども一人ひとりに丁寧に関わることができる環境が整えられていた。

研修期間中、私の参加した Sopulit グループでは、約10名中4名が自閉症などによる特別な配慮を必要としている子どもであり、特別な配慮を必要とする子どもについてはそれぞれに1対1の支援者が配置されていた。しかし、支援が必要な子どもたちも他児と同じ空間・同じ時間を共有しながら生活しており、「インクルーシブ＝全員が同じ活動をする事」ではないことを実感した。子どもたちはそれぞれの発達や興味に応じた活動を行っており、ある子どもはパズルに取り組み、別の子どもは紐通しやタブレットを使った筆記練習を行うなど、「共に過ごしながら、一人ひとり異なる活動を行う」という実践を行っていた。

また、保育の中では視覚支援が非常に充実していた。絵カードを用いて「今」「次」「その後」の活動を示し、子どもたちが見通しを持



(左) 少人数ずつの室内遊び。希望する遊びに名前を貼る。



(右) 朝のサークルタイムの様子。



絵カード

って生活できるよう工夫されていた。支援ツールはラミネート加工やマジックテープを活用し、子どもの理解度や活動内容に応じて柔軟に変更されていた。こうした支援は特別なものとして切り離されるのではなく、日常の保育の中に自然に組み込まれていたことが印象的であった。

保育園に特別教育教師が在籍し、さらに、言語聴覚士や作業療法士などの専門職が地域単位で配置され、必要に応じて保育現場を訪問していた。専門職は子どもの遊びや生活の様子を観察しながら、言語、コミュニケーション、感覚特性、人との関わりなどを評価し、保育者と連携しながら支援方法を検討していくとの話であった。支援を必要とする子どもを支援を行う特別な場所へ移動させるのではなく、支援を必要とする子どもの元へ専門職が足を運び、特別な支援を必要とする子どももそうでない子どもも同じ環境で生活している実践を目の当たりにした。また、フィンランドでは正式な診断がなくても、子どもの困り感や支援の必要性が確認できれば早期から支援を開始できるとのことであった。Sopulit グループに在籍する特別なニーズを要する子どもたちは6歳児であり10月から始まる新学期からはプレスクールへと巣立っていくとのことであった。進学先のプレスクールには、一般の学校の中に特別なニーズを要する子どもたちのグループがあり、特別なニーズを要する子どもたちのグループでは7人の生徒に対して1名の教師と4名の支援員が配置されるとのことであった。この時期からすでにSopulit グループ担当の教師が小学校との連携を図るために小学校との引継ぎがスタートしており、地元の小学校でしっかりとした支援を受けられる体制が整っていることを改めて感じた。



特別教育教師による活動の様子



この日は雨。外気温は10度程とまだまだ寒いフィンランド。雨でも、雪でも、冬の季節の日照時間が短いときも、外遊びは大切にされている。

保育環境については、自然を活かした遊びが日常的に行われており、雪遊びやスキー、スケートなど身体を十分に使った活動が重視されていた。特に感覚遊び (sensory play) を大切にしており、自閉スペクトラム症



嗅覚を使う取り組み

の子どもたちの感覚特性についても、保育者が深く理解した上で関わっていた。また、個別支援計画をオンラインで保護者と共有し、家庭と園が一緒に子どもの育ちを支えている点も印象的であった。

運営面では、給食や清掃業務を外部企業へ委託することで、保育者が保育に専念できる体制が整えられていた。専門職との連携、役割分担、人的配置など、多面的な「仕組み」によってインクルーシブ保育が支えられていることを強く感じた。さらに、多文化共生の視点も日常的に取り入れられており、園にはフィンランド語以外を母国語とする家庭が約 10 か国語にわたって在籍しているとの説明があった。日ごろの園生活においては子どもたちとのやり取りはフィンランド語が中心であったが、保護者と保育者は、必要に応じて Google 翻訳などの翻訳ツールを活用しながらコミュニケーションを図っており、多様な言語や文化背景を持つ家庭も自然に受け入れられている様子が見られた。

また、地域の子育て支援施設である「Varkauden Perheentalo」(直訳：バルカウスの保護者の家)も訪問した。Perheentalo では、子どもたちが自由に遊びや制作活動を楽しめるだけでなく、保護者同士の交流や多文化家庭への支援も行われていた。英語や翻訳ツールを活用しながら、さまざまな国籍や文化背景を持つ家庭が自然に交流できる環境が整えられており、地域の中で孤立を防ぎ、コミュニティーを形成する役割を果たしていた。



5日間という日程を、Sopulit グループにて過ごさせていただいた。期間中、他グループの先生方にも温かい言葉をかけていただき、園全体から歓迎されていることを肌で感じる5日間であった。日本とフィンランドの制度の違いについても意見交換させていただき時間をいただき、ディスカッションと併せて、こ

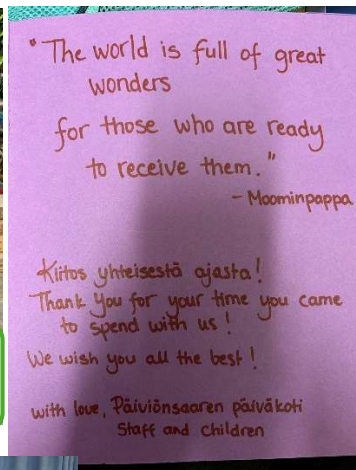


の園にわが子を通わせる保護者でもある新聞記者の ilona さんより「日本からインクルーシブ教育について学びに来た私について、日本とフィンランドの幼児教育体制の違いについて」インタビューを受けた。

今回の視察を通して、フィンランドでは「同じであること」ではなく、「違いを前提に共に生活すること」が大切にされていることを強く感じた。支援を特別なものとして切り分けるのではなく、日常生活や地域の中に自然に組み込みながら、子ども一人ひとりを中心に支えていく文化と制度が根付いていた。日本においても、専門職との連携や業務分担、地域全体で子育て家庭を支える仕組みづくりを進めていく必要性を改めて感じた。



(左) Tiina 園長先生と私を研修園に紹介してくれた (右) Tiina さん。ダブル Tiina !!



←素敵な言葉を贈ってもらいました。
“受け取る準備のできている人には、
世界は素晴らしいもので満ちている
ムーミンパパ”



←日本の手遊び歌♪キャベツの中から♪を子どもたちと歌いました。

→地元新聞「WARKAUDEN LEHTI」の記者 ILONA さんが私の研修について興味をもたれ、2026/5/9 の記事で取り上げていただきました！



MAINOS | Tilaa Warkauden Lehti digi 7.90 €/kk ja saat jopa 2 kk kaupan päälle!

[Etusivu / Paikalliset](#)

Tiina Varkaudesta tutustui 1990-luvulla Tokiossa Yumikoon – Se toi japanilaisen päiväkodinjohtajan Varkauteen



Kanako Harada ja Kati Vuorela ovat vaihtaneet ajatuksia suomalaisesta ja japanilaisesta varhaiskasvatuksesta. Harada vieraili Päiviönsaaren päiväkodissa. ILONA NOPONEN

↑→
Tiina
さんと
サイクリング



(下段) 土曜日、「機械音楽博物館 (Mekaanisen Musiikin Museo)」を訪問。館内には自動演奏ピアノや蓄音機、ジュークボックスなど約 350 点が展示され、100 年以上前の録音も実際に聴くことができた。ガイドツアーでは、機械音楽の歴史と技術の発展について学べる。

